



探究学習を始めとして、これからの生徒の学びにおける教師のあり方が問われている。それは日本だけではなく、世界的な潮流であり、「The Future of Education and Skills 2030」でも主要なテーマとして議論されている。2019年8月開催の研究会のレポートから、世界の動向をつかむ。

# 生徒や教師の「エージェンシー」を 育む学びのあり方とは？

## 「地方創生イノベーションスクール2030 第2期 (ISN2.0)」

### 第4回研究会

1つのテーマを多角的に議論し、  
新たなアイデアの創造を図る

OECDは、2030年に向けた教育のあり方を考えるプロジェクト「The Future of Education and Skills 2030」を推進している。よりよい社会を実現するために求められる学びの枠組みとして、「The OECD Learning Compass 2030 (以下、ラーニングコンパス)」(図1)を策定。「Transformative Competencies」(よりよい未来の創造に向けた変革を起こす力)や「Taking responsibility」(責任ある行動をとる力)などを、子どもたちへの育成を目指す資質・能力として定義し、それらを育む学習過程として、「Anticipation」(見通し)、「Action」(行動)、「Reflection」(振り返り)から成る「AARサイクル」を示した。そして、そのサイクルを回していく原動力として、「自ら考え、主体的に行動する資質・能力」といった意味の「エージェンシー」を位置づけた。

そのエージェンシーを生徒や教師が高めていく学びのあり方とは何か、「ラーニングコンパス」を具体

的な実践と結びつけて理解しよう  
と、19年8月、OECD日本イノベ  
ション教育ネットワーク(以下、I  
SN。\*1)の第4回研究会が開か  
れた(図2)。

開会式では、東北クラスター(\*  
2)の福島市チームを代表して、福  
島県立福島東高校3年の本多美久さ  
んと同県立福島南高校3年の山谷実  
加さんが、他者との協働の大切な  
びを語った。また、ISN共同代表  
を務める福島大学の三浦浩喜副学長  
が、次のように期待を述べた。

「本研究会には、『生徒たちがより  
よい社会をつくるために必要な力  
をつけることのできる教育の実現』と  
いう目標を共有する、多様な年齢や  
職業の人たちが集まっています。そ  
うした環境での議論は、1つのテー  
マを多くの視点から捉え、目標達成  
に向けたアイデアを生む源泉になる  
と考えています」

#### 教師のエージェンシーを高める 「生徒が主役」という意識

エージェンシーについての理解を  
深めるための1日目のプログラム

は、3つの柱から構成された。  
1つめは、ISNの実践校である  
福島県立ふたば未来学園中学校・高  
校(以下、ふたば未来学園中学校・  
高校)の南郷市兵副校長、同校の  
卒業生である新潟大学工学部1年の  
遠藤瞭さん、高校時代に和歌山クラ  
スターの一員として地方創生と向き  
合った東京学芸大学教育学部1年の  
山本詩央理さんによる、探究学習に  
ついてのシンポジウムだ。

ふたば未来学園中学校・高校は、  
15年度、東日本大震災における福島  
第一原子力発電所の事故で甚大な被  
害を受けた双葉郡に開校した。困難  
を乗り越えて新たな価値を生み出せ  
るよう、全学年で探究学習に力を入  
れており、2・3年次は、「未来創造  
探究」と題して生徒が自ら課題を設  
定するPBL(\*3)を行っている。  
遠藤さんは、その授業で福島第一  
原子力発電所の廃炉をテーマとして  
PBLに取り組み、同原子力発電所  
や青森県上北郡六ヶ所村の核燃料再  
処理施設を視察したり、福島市の高  
校生と廃炉について語り合う座談会  
を実施したりした。

「PBLに取り組む中で見えてき  
たのは、地域住民が廃炉に関しての

\*1 国際連携で教育研究を行う産学コンソーシアム。  
\*2 ISNにおける探究学習に取り組む集団。東北・福井・和歌山・広島・高等専門学校などのクラスターがある。  
\*3 Problem Based Learning、あるいはProject Based Learningの略。

図1 「The OECD Learning Compass 2030」(ラーニングコンパス)



\* OECD のホームページ「The OECD Learning Compass 2030」をそのまま掲載。

意思決定にかかわっていないという課題です。そこで、行政に期待するだけではなく、自分が積極的に動き、他者との協働の輪を広げる必要があると考えました。それを行うためには、まずは放射線物理学を専門的に学ぼうと、新潟大学工学部に進学しました」(遠藤さん)

南郷副校長は、「未来創造探究」では、教師が「指導」するのではなく、生徒自身に「気づかせる」こと

を大切にしていると強調した。「『未来創造探究』における教師の役割は、生徒が視野を広げられるようにアドバイスをしたり、参考文献を示したりすることです。学校外の機関との交渉も基本的に生徒が行い、教師は、交渉先に知人がいれば生徒に紹介するなどの橋渡しをしています。『生徒が主役』という意識を持って活動を工夫することで、教師のエンジェンシーも高まります」

図2 「地方創生イノベーションスクール2030 第2期 (ISN2.0)」第4回研究会プログラム

1日目

開会式

福島県立福島東高校3年 本多美久さん  
 福島県立福島南高校3年 山谷実加さん  
 ISN共同代表責任者、福島大学理事・副学長 三浦浩喜氏

シンポジウム 地方創生・社会創生の実践

福島県立ふたば未来学園中学校・高校 副校長 南郷市兵氏  
 新潟大学工学部1年 遠藤 瞭さん  
 東京学芸大学教育学部1年 山本詩央理さん  
 [司会] ISN事務局長、東京大学公共政策大学院客員研究員 小村俊平氏

座談会 OECD Education 2030 9th IWG 報告と Learning Compass2030

福井県立若狭高校2年 竹内陽渚さん  
 筑波大学国際総合学類2年 中畑 希さん  
 OECD教育スキル局初等中等学校教育課シニア政策アナリスト 田熊美保氏  
 [司会] 福井大学教職開発講座准教授 木村 優氏

チーム学習 「Learning Compass2030」から学ぶ 参加者全員が12のチームに分かれ、「ラーニングコンパス」で重視されている資質・能力や学習方法について議論

2日目

挨拶

ISN代表、東京大学公共政策大学院教授 鈴木 寛氏

ワークステーション 参加者全員がISNの研究プロジェクトチームごとに分かれ、各チームが設定したテーマについて議論

ラウンドテーブル 研究プロジェクトチーム混合のグループを編成し、ワークステーションでの議論の内容を共有

「生徒国際イノベーションフォーラム2020」に向けた目線合わせ 2020年に開催予定の同フォーラムの目的などについて、参加者全員で検討

閉会式

ISN共同代表責任者、福島大学理事・副学長 三浦浩喜氏

山本さんは、ISNでの活動を振り返り、失敗から学ぶことが多かったと語った。その1つは、自身が中心となり、イベントを企画した際に経験した失敗だ。山本さんは、事前準備で自分に多くの作業を割りあてたが、学校の授業や部活動などが忙しく、思うように作業できなかった。結果的に、イベントの開催が遅れてしまったという。

「以前の私は、『自分でした方が効

率よくできる』と思い込み、1人で作業を抱え込んでしまっていました。それが、イベント開催が遅れてしまった原因でした。その経験から、1人ではできないと思ったなら、すぐに誰かに相談するようになりました」

2つめの柱は、19年5月にカナ

**教師のよりよい生き方が、生徒の学びの充実につながる**

「Informal Working Group Meeting」

（以下、IWG。＊4）に出席した、福井県立若狭高校2年の竹内陽渚さん、筑波大学国際総合学類2年の中畑希さん、OECDのシニア政策アナリストの田熊美保氏の3人による座談会だ（写真1）。

まず、生徒のエージェンシーについて語り合い、中畑さんは「やりたいことに挑戦しようとする意欲」



写真1 座談会では、福井大学の木村優准教授の司会により、生徒のエージェンシーや、他国の学生・生徒との交流の中で感じた日本の学校の課題などが議論された。左から木村准教授、田熊氏、竹内さん、中畑さん。

竹内さんは「自分の考え」をエージェンシーの中核として位置づけた。

「IWGに参加し、海外では、相手の主張に同意するだけでなく、建設的な修正案などを示すことが求められると感じました。そうした議論を通して、自分と他者との共通点や相違点が浮き彫りになり、自分の考えをより明確にできました」（竹内さん）

田熊氏は、竹内さんのように、自分の変化や成長を客観的に把握することによって、生徒はメタ認知を深め、エージェンシーを高めていくことができると説明した。

「生徒がメタ認知を深めるためには、教師のかかわりが鍵となります。例えば、生徒同士や生徒と教師が遠慮なく話し合えるよう、学校に否定されない雰囲気をつくるといったことです。その実現のために、先生方には、教師のエージェンシーを発揮していただきたいと思います。先生方が疲弊していたら、生徒も新しい工夫をしようという前向きな気持ちになりにくいでしょう。生徒の学びを充実させるためには、教師自身がよりよい生き方を考えることが欠かせません」

図3 チーム学習での各チームのテーマ

- ◎ 「エージェンシー」にかかわるテーマ
  - チームA1：生徒のエージェンシー
  - チームA2：共同エージェンシー
  - チームA3：教師のエージェンシー
- ◎ 「AARサイクル」にかかわるテーマ
  - チームB1：Anticipation（見通し）
  - チームB2：Action（行動）
  - チームB3：Reflection（振り返り）
- ◎ 「Transformative Competencies<sup>\*1</sup>」にかかわるテーマ
  - チームC1：Creating new value<sup>\*2</sup>
  - チームC2：Taking responsibility<sup>\*3</sup>
  - チームC3：Reconciling tensions and dilemmas<sup>\*4</sup>
- ◎ 「Competencies & Well-being 2030」にかかわるテーマ
  - チームD1：Constructs of compound competencies
  - チームD2：Core foundations
  - チームD3：Well-being 2030

<sup>\*1</sup> よりよい未来の創造に向けた変革を起こす力。  
<sup>\*2</sup> 新たな価値を創造する力。 <sup>\*3</sup> 責任ある行動をとる力。  
<sup>\*4</sup> 対立やジレンマに対処する力。  
 ＊研究会資料を基に編集部で作成。

教師のエージェンシーの本質とは何か

者が全体に向けて発表した。

柱の3つめは、参加者全員によるチーム学習だ。ラーニングコンパスで重視されている資質・能力や「エージェンシー」、学習方法である「AARサイクル」、「Transformative Competencies」 「Competencies & Well-being 2030」を大テーマとし、それぞれに3つの小テーマを設けて、6人1組のチームに1つずつ振り分けた（図3）。各チームで議論をした後、その内容をチームの代表者が全体に向けて発表した。大半のチームで重要な論点となったのはエージェンシーであり、教師のエージェンシーにかかわる内容が目立った。例えば、メンバー6人中5人が高校教師だったチームA3では、教師のエージェンシーの本質は、「生徒がキラキラしていることに喜びを覚える意識にある」と結論づけ、具体的な行動を起こす前に、自分がそうした意識を強く持っているかどうかの検討が欠かせないとした。同じく、メンバーの多くが高校教師だったチームC1では、「Creating

\*4 OECD加盟各国の政府関係者や高校生、大学生、教師が集まり、近未来の社会で求められる資質・能力やその育成方法について議論をする国際会議。

new value」(新たな価値を創造する力)を生徒に育成する方法について検討。メンバー全員の考えが一致したのは、教師が新たな価値の創造を自分事として捉える必要があり、それが教師のエージェンシーと密接にかかわるといふ点だ。また、自分事として捉えられるようになるために、「日々の生活や業務など、自分の身の回りの環境を少し変え、変化によって生じた違いを記録する」といったアイデアも出された。

**探究学習を通して、成長を実感する生徒たち**

2日目の午前のプログラムでは、「ワークステーション」と「ラウンドテーブル」が行われた。

第2期のISNの実践校や研究校では、ラーニングコンパスに示された資質・能力と密接に関連する① Learning & Teaching for Student Agency ② Future We Want ③ Transformative Competencies & Curriculum ④ Innovative Curriculum Developmentの4分野について、研究プロジェクトが推進されている。ワークステーションでは、参

加者全員がいずれかの研究プロジェクトチームに加わり、チームの研究テーマについて議論した(写真2)。その後のラウンドテーブルでは、各研究プロジェクトチーム混合の十数グループに分かれ、ワークステーションで語り合った内容を共有した。

全グループの議論に共通していたのは、探究学習は、生徒のエージェンシーを高める原動力となるといった認識だ。実際、「ISNや学校での探究学習を通して、自分の考えを論理的に説明したり、自分で設定した目標の達成に向けて粘り強く取り組んだりすることができるようになった」と語る高校生や大学生が目立った。



写真2 ②「Future We Want」をテーマとしたチームでは、高校生と大学生、社会人混合の小グループをつくり、探究学習に取り組む中で感じた課題やその対応策などを出し合った。

ンシーを高める原動力となるといった認識だ。実際、「ISNや学校での探究学習を通して、自分の考えを論理的に説明したり、自分で設定した目標の達成に向けて粘り強く取り組んだりすることができるようになった」と語る高校生や大学生が目立った。

ただし、探究学習を充実させていくためには課題もあろう。例えば、探究学習は、「それに関心のある生徒だけが取り組む『特別な学習』だ」という意識を、多くの教師が持っている」と話す高校の教師も少なくなかった。そうした中、教師間の意識の差を解消する方法を検討することも、教師のエージェンシーとして重要になるとされた。

**海外との交流を強化し、より多様な学びを実現**

ISNでは、第2期における探究学習や研究プロジェクトなどの成果を世界へ発信するため、海外のパートナー校の生徒や教師らを招く「生徒国際イノベーションフォーラム2020」を、20年8月に実施しようとして計画している。今後、ISNに

かかわる全国の高校生や大学生、高校の教師、大学教員から成る実行委員会を設置し、企画を練り上げていく予定だ。

そこで、2日目の午後には、同フォーラムに向けた目線合わせとして、参加者全員が数グループに分かれ、同フォーラムで大切にしたいことを検討した。「フォーラムの目的が、単なる情報発信であれば、インターネット上でもできる。海外の生徒らと直接交流する機会を設ける意義は何なのか」といった問いを立てて話し合い、まとめとして、グループの代表者による意見交換が行われた。そして、「海外からの参加者とのつながりを深め、新たな価値を創造できるよう活動を工夫する」という方向性が打ち出された。

閉会式では、三浦副学長がISNの今後の展望を次のように語った。

「よりよい社会を実現するためには、一人ひとりがエージェンシーを高めるとともに、互いの気づきや学びを共有することが大切です。そうした実りがある活動を充実させられるよう、今後は海外との交流をさらに活性化し、よりよい社会の実現を目指していきたいと考えています」